

譲歩関係を表す接続表現の日中対照研究 —「即使類」複文を中心に—

張 銳

1. はじめに

譲歩関係を表す複文に関して、日本語と中国語それぞれの文法体系において多くの研究がなされている。たとえば、日本語では論理関係の観点から複文を体系化した研究（坂原 1985、小泉 1987 など）がある。これに対して、中国語は従属節と主節の意味上の関係の観点から複文を体系化した研究（黎 1924、郭 1999 など）が主流になっている。また、張（2016）では、日本語で譲歩関係を表す接続表現「ても」と「ところで」に対応する中国語表現を考察し、「即使」²の使用が一番多いという結果を指摘している。しかし、両言語における譲歩関係を表す複文の異同は十分な議論がなされていないため、検討の余地が残されている。したがって、本稿では、従来の研究に基づき、日中両言語における譲歩関係を表す複文、とりわけ「即使類」³譲歩複文の比較を行う。意味上、構文上の観点から、両言語の譲歩関係を表す複文における類似点、相違点を明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究と研究目的

2.1 日本語における譲歩文の先行研究及び本稿における譲歩の定義

複数の物事について陳述する際、よくそれらの物事の関係に着目し、適切な接続表現が用いられる。物事の関係は因果関係であれ、譲歩関係であれ、いずれも論理関係の一種である。日本語を対象とした研究では論理関係を用いて譲歩文を体系化する分析に二つの流れがある。一つは「原因・理由文」を中心とした分析で、言語学研究会・構文論グループ（1986）の一連の研究が挙げられる。ここでは「うらめ・ゆずりの」という用語が用いられている。もう一つは、論理学に基づいた条件文を中心に分析したもので、坂原（1985）、小泉（1987）、前田（1991）などがある。小泉（1987）では、「譲歩」という用語が用いられ、前田（1991）では「逆接」という用語が用いられている。また、坂原（1985）は条件文と譲歩文の関連について、以下のように述べてい

¹ 佐久間（2002：162）では、「接続表現とは、文章・談話論における接続機能を有する語句の総称であり、品詞論の接続詞、接続助詞や構文の接続語、接続句に対する概念である」と定義している。本研究は接続表現について広範にわたって論じるものではないが、接続機能を持つ「接続助詞」について検討するものであるため、佐久間（2002）に従い、扱う研究対象を「接続表現」と呼ぶ。また、中国語では接続機能を有するものを「關聯詞語」と呼ぶが、便宜を図るため用語を統一し、中国語の「關聯詞語」も「接続表現」と呼ぶことにする。

² 「即使」は仮定や譲歩を表し、従属節の仮定の状況に主節の結果や結論は影響を受けない接続詞である。

³ 邢（2001：440）「即使」と「即便・即或・即令」の意味や用法が基本的に同じであるため、本研究で「即使」類と総称する。「即使」類關聯詞語を使用する複文を「即使」類譲歩複文とする。

る。

条件文「pならばq」は暗黙の前提を持ち、この前提が成立しないなら、否定されることがある。否定されてもまだ残存しているpとqの関連についての思い込みは、譲歩文「pであってもqでない」という言語形式で表される。譲歩節とは、補助仮定の不成立により、期待される結果を実現し損なった仮定節に過ぎず、いうなれば、中途で挫折した前件である」を述べている。また、条件文と譲歩文における言及世界の切り換えについては、条件文を中心に据えて、条件文に付随する暗黙の前提が成り立っているかどうか、条件節が確定されているかどうかの観点から、譲歩文や理由文が成り立つ。(坂原 1985: 125-127)

坂原 (1985)、小泉 (1987) による「譲歩文は結果的に条件文が成立しないことを推意している文、すなわち条件文の結果的否定」というのは、言い換えれば、通常の状態で成立する条件が、この特別な状況に限り成立しないということである。

また、日本語文法事典 (2014) において「譲歩」の定義はこのように述べられている。

事態Xが事態Yを引き起こすという因果関係が一般的に予測される場合において、それとは逆の関係、すなわちXがYを引き起こさないことを表す表現を譲歩という。例えば、「薬を飲んでも熱がさがらない」は、「薬を飲む」ことによって「熱が下がる」と一般的に予測されるが、それが成り立たないことを述べる。

本稿では、小泉 (1987) と日本語文法辞典 (2014) に基づき、「譲歩関係」を、従属節から予測される結果が主節で得られないという前後節の関係と定義する。

2.2 中国語における譲歩複文の先行研究

中国語の譲歩複文に関する研究は多くなされている。主従複句が表す関係について大河内 (1967) は従属節が已然表現であるか、未然表現であるかによって因果、条件、逆接、譲歩の四種類に分けた。そして、従属節が未然表現のものが譲歩文であると述べた。劉他 (1991) では従属節と主節の間の文法関係に基づき、複文を等位複文と主従複文に二分した。また、譲歩複文とは従属節である事実を認めて譲歩し、主節が反対の角度から逆の意味を述べるような文であると述べている。王 (1994) は論理関係の角度から、譲歩関係を表す複文を転折複文⁴に繰り入れ、郭 (1999) も前後の意味関係から譲歩複文を転折複文の下位分類としている。また、邢 (2001) は譲歩複文は譲歩性と転折性を持ち、従属節の表す事態のレアリティが仮定か事実かという表現の特徴に基づき、譲歩複文を容認性譲歩複文⁵、虚擬性譲歩複文、無条件譲歩複文、忍讓性譲歩複文の四種に分けている。それぞれの典型的な表現形式は「虽然…但…」「即使…

⁴ 転折複文の定義について、劉他 (1991) に従い、正句 (日本語の主節に相当する) には偏句 (日本語の従属節) の事実と反対の事実または部分的に反対の事実を述べる複文である。

⁵ この容認性譲歩複文は転折複文と混ざり合いやすく、この二つの複文の区別は、容認性譲歩複文の従属節は主観的な仮定のと既成の事実を譲って認めたが、転折複文の従属節は一般的に言えば客観的な既成の事実を描くのである。

也…」 「无论…都…」 「宁可…也…」 である。また、「即使類」譲歩複文を「即使類」実言句と「即使類」仮言句の二類に分けた。本稿では「即使類」譲歩複文と日本語の対照研究に注目するため、実言句と仮言句を分けず、譲歩を表す「即使類」複文を対象にする。

2.3 譲歩の日中対照に関する先行研究と本稿の目的

譲歩関係を表す接続表現に関する研究では単一言語を対象とするものは多く行われてきたが、日中対照研究はあまり多くは見当たらない。数少ない研究として、鄭(1994)、張・李(2012)、張・趙(2014)、張他(2015)などがある。鄭(1994)においては研究対象が「ても」だけに絞られ、譲歩文が中心とする日中対照がなされており、「ても」に関する譲歩の用法を①仮定の逆接条件②確定の逆接条件③逆接の一般条件④無条件⑤慣用的表現の五つに分類し、それぞれの用法における日中両言語の類似点と相違点について述べている。また、張他(2014、2015)は譲歩文を類型論の観点から典型的形式、複合辞的形式、接続的形式といった三類型の形式があると述べ、関数検定方法を用い、テモ文に対応する中国語訳の接続表現及びそれぞれの接続表現との関連度を考察した。

以上の先行研究は日中両言語の譲歩文について細かく分類し対照考察を行っているが、分析の対象が「ても」だけに留まっているため、両言語の譲歩関係を表す構文上の特徴を網羅できたとはいえ切れない。

そこで、本稿では譲歩関係を表す「即使類」の中国語原文とその日本語訳文の対応関係に基づいた対照考察をし、両言語における譲歩関係を表す複文の構文上、とりわけ接続表現の異同、主語の位置、否定辞の有無に着目し、その類似点、相違点を明らかにすることとする。

3. 調査資料と調査方法

本稿では譲歩関係を表す複文の日中対照に重点を置くため、譲歩関係を表す「即使類」複文を調査対象とする。北京日本学研究中心が開発した「日中対訳コーパス」⁶ (2003) の中から中国語原文とその日本語訳、日本語原文とその中国語訳を調査資料とする。その詳細については、本稿の末尾の用例出典を参照されたい。

本稿で行う分析の方法は以下の通りである。①中国語原文から「即使・即便」の実例を取り上げ、その翻訳との対応関係を検討し考察を行う。②手順①で得られた結果を裏付けるため、日本語原文と中国語翻訳の対応関係を見ていく。その方法は①とは異なり、まず、中国語訳文から「即使」類を含む譲歩関係を表すものを抽出する。そ

⁶ 北京日本学研究中心企画、国際交流基金の研究助成と中国社会科学基金の助成を受けて中日両国の研究者の協力者により開発され、2003年に公開された日本語と中国語の対訳コーパスであり、小説、エッセイ、伝記、政治評論・白書、法律関連文書・条約文書、詩など各ジャンルからなる。本研究で用いた『中日対訳コーパス』は、首都大学東京日本語教育学教室長谷川守寿が北京日本語学研究中心と交わした覚書にもとづき使用したものである。

して原文を辿り、それらがどのような表現から翻訳されたかについて検討する。例文を抽出する際、以下の3つを調査の対象外とした。

第1に、接続詞としての「それでも」「だが」が使われる文を対象外とした。例えば、(1)と(2)の「即使」がそれぞれ「それでも」と「だが」に訳され、日本語訳文で接続詞を用いている。本稿では複文における接続表現を対象にするため、除外した。

- (1) 即使穿这样的鞋他也还要在脚趾前大量塞上棉花。(《活》)
- (1') それでも靴の先にたくさん綿を詰めなくてはならない。(『応』)
- (2) 即使在当时, 这快乐的日子也是那样令人觉得生疏, 她甚至于觉得那时候进图书馆、上课堂、听鲁迅和胡适的演说的姜静宜已经云消雾散、不见踪迹了。(《活》)
- (2') だがその頃から何かなじめず、図書館や教室に出入りし、鲁迅や胡適の演説を聞いているのは一人別の静宜のような気はしていた。(『応』)

第2に、「即使」の修飾するものが名詞である場合、つまり、複文でない文を対象外とした。

- (3) 即使是一句简单的话, 不论哪一个听到也会高兴。(《家》)
- (3') ちょっとしたことでも誰だって嬉しいじゃないか。(『家』)
- (4) 即使这种研究, 如果有大学方面推荐的话。(《情》)
- (4') こうした研究でも、大学方面からの推薦でもありますとね。(『あ』)

第3に、中国語原文で「即使」を使うが、日本語訳文で意識される場合、つまり、接続表現を使わず、単文に訳されるのは対象外とした。

- (5) 因为即使在用完胭脂和唇膏, 收起胭脂和唇膏以后静珍的脸上仍然没有任何红的印子。(《活》)
- (5') 紅を使った後の静珍の顔には、べに色の片鱗さえないのだから。(『応』)
- (6) 祖師を捨てた仏弟子は、墮落と言われて済む。(『破』)
- (6') 他们即使背弃了祖師, 也只不过是说他墮落罢了。(《破》)

4. 結果と考察

3. で述べた調査方法に従い、両言語における譲歩関係をを表す例文を抽出した結果は表1に示すように、中国語原文118例、日本語原文からは83例である。抽出された例文を構文要素、主語の位置、否定辞の有無の観点から、両言語における譲歩関係を表す例文の類似点、相違点を考察していく。

表1 「即使」類に対応する接続表現使用数

	作品名	接続表現使用数	合計
中国語原文	《活》	24	118
	《家》	7	
	《呐》	10	
	《仿》	8	
	《人》	13	
	《骆》	37	
	《钟》	19	
日本語原文	『あ』	22	83
	『破』	11	
	『ノ』	34	
	『金』	16	

4.1 譲歩関係を表す接続表現の異同

譲歩関係を表す接続表現に関して、日本語においては接続表現が必須の成分で、なければ複文にならない。これに対して、中国語において文を構成する際、接続表現が必須の成分ではないことはすでに張・趙 (2014)、張 (2016) などによりすでに報告されている。本稿で抽出した「即使類」複文に対応する日本語の接続表現は「ても」、「たところで」、「たって」、「にしても」、「としても」などが見られた。また、「即使類」に対応する日本語複文では、「たとえ・いくら・もし・仮に」などのモダリティ副詞によって従属節が導かれる例が多く確認できた。全体としてはこれらの副詞と共起を示す (7) (8) のような例と、(9) (10) のような副詞との共起が見られない例も観察された。

- (7) たとえ口の酸っぱくなるほど他の事を話したところで、自分の真情が先輩の胸に徹える時はないのである。(『破』)
- (7') 即使谈得唇焦口燥, 也还是不能是前辈洞悉自己的真情实意。(《破》)
- (8) いくら大戦争が始まっても、氷河の上では何の影響もない。(『あ』)
- (8') 即使再大的战争, 对冰河也没有任何影响。(《情》)
- (9) 僕はしばらくのあいだ講義には出ても出席をとるときには返事をしないことにした。(『ノ』)
- (9') 相当一段时间里, 我决定即使去上课, 点名时也不回答。(《挪》)
- (10) 直子は自分の部屋に僕を入れて食事を作ってくれたりもしたが、部屋の中で僕と二人きりになっても彼女としてはそんなことは気にもしていないみたいだった。(『ノ』)
- (10') 直子把我放在她的房间去给我做饭, 可是房间里即使只有我们两个人时她

似乎也没有在意那件事。(《挪》)

本稿で中国語原文と日本語原文をそれぞれ集計し、そこで、両言語における譲歩関係を表す接続表現が副詞と共起することによってどう異なるかを調べ、その比率を表2にまとめた。

表2 中国語原文と日本語原文における副詞と共起する文の出現数と比率

	中国語原文				日本語原文			
副詞と共起有無	副詞形式	出現数	比率		副詞形式	出現数	比率	
共起する	たとえ	44	59	50%	たとえ	6	17	20.5%
	仮に	6			いくら	4		
	たとい	5			仮令	4		
	いくら	2			もし	2		
	いかに	1			たとえば	1		
	よしんば	1						
共起しない	59		50%	66		79.5%		

表2を見ると、日本語原文に比べ、中国語原文における副詞と共起する文の出現率はかなり高いことが分かった。

概して、日本語では譲歩関係を表す接続表現は「ところで」、「ても」、「としても」などがあり、「つきそい文のうらめ条件性を顕在化し強化する」(小矢野 1998:125) という「たとえ・いくら・もし」などのモダリティ副詞は譲歩関係を表す接続表現と共起し、譲歩文においては条件性を強調する機能があると考えられる。

- (11) これは少し話が大きいとしても、まあ、七千メートルから八千メートルぐらいはあるだといわれていますよ。(『あ』)
- (11')) 即使这种说法有些夸张, 但七、八千公尺高的山也还是可能有的。(《情》)
- (12) たとえ何が起こったにせよ、それを良い方向に進めていくことはできるわよ。(『ノ』)
- (12')) 即使发生什么, 也可以使其朝好的方向发展。(《挪》)

しかし、中国語において、譲歩関係を表す接続表現には「即使」のような接続表現と「也」のような副詞の2種類がある。「即使」は複文において前後節の意味関係を表し、従属節に用いられる接続表現である。(13) のように主節には「也」「还」などの副詞をも含む例文がよく見られた。接続表現と副詞がともに使われる場合もあるが、この場合、副詞は構文において必須の構成要素とはいえない。わざと副詞をつけ加えるのは、従属節の事態が発生するにもかかわらず、主節の結果が変わらないことを強

調するためだと考えられる。

(13) 即使和讨饭的女人说话, 也是万不可省的。(《仿》)

(13') たとい相手が乞食女であつても、この言葉は絶対に省けない。(『仿』)

また、(14)のように譲歩複文の主節が平叙文であるのは圧倒的に多いが、(15)、(16)のように主節が反語文⁷である例文もみられた。反語文はある明らかな道理や事実に対して反語の語気を使ってそれを肯定または否定することによって語調を強める働きがある。この場合、主節が平叙文ではなく、反語文を用いるのは主節の事態を強調するため、主節におかれる転折部分を導く副詞「也」などが省略されることは多いと考えられる。

(14) 即使在政治上、军事上是分裂的，文明是统一的。(《活》)

(14') たとえ政治的、軍事的に分裂していても、文明は統一されている。(『応』)

(15) “给报馆里？便在这里很大的报馆里，我靠着一个学生在那里做编辑的 大情面，一千字也就是这几个钱，即使一早做到夜，能够养活你们么？”(《呐》)

(15') 「新聞社？この一番大きな新聞社だって、僕の教え子の編集者に口をきいてもらって、千字でいくらだったかな、朝から晩まで書き続けたって、お前たちを食わせていけるもんか。」(『呐』)

(16) 即使遇不上大兵，他自己那身破军衣，脸上的泥，与那一脑袋的长头发，能使人相信他是个拉骆驼的吗？(《骆》)

(16') またたとえ兵隊に出会わなかったとしても、このぼろぼろの軍服、泥だらけの顔、伸びほうだいの髪で、駱駝ひきでございといつてとおるものだらうか。(『駱』)

日本語の譲歩複文においては接続表現の使用が必須であることは承知のとおりである。今回の調査を通して、中国語の「即使類」複文においても接続表現の使用は必須であることが分かった。しかし、日本語では「接続表現のみ」と「副詞+接続表現」の二つのパターンがある。しかも、副詞にしても、接続表現にしても、従属節にしか用いられないことが分かった。これに対して、中国語では「接続表現のみ」、「副詞のみ」、「接続表現+副詞」三つのパターンが見られた。

すなわち、「としても」は接続表現であり、「たとえ」は副詞として、従属節を導くものである。「たとえ」は中国語の接続表現「即使」に相当し、譲歩複文の構文マーカーとみなされるため、構文上の機能を果たしている。一方、「ても」「たところで」「と

⁷ 定義は劉他 (1991:677) に従う。反語は強調を表す一つの方法である。平叙文も各種の疑問文も、そこに反語の語気を加えることによって反語文をつくることができる。ある明らかな道理や事実に対して反語の語気を使ってそれを肯定または否定することによって語調を強める働きがある。

しても」などの接続助詞も中国語の接続表現「即使」にも相当するが、意味上の機能を果たしているので中国語では三つのパターンが見られたと考えられる。

4.2 両言語における主語の位置に関する異同

前節で両言語の接続表現の異同および副詞と共起するかについて検討し、記述した。本節では、主語の位置から両言語の譲歩複文の相違点を論じる。日本語の譲歩関係を表す接続表現は常に従属節に後接されているのに対し、中国語の接続表現は常に従属節または主節の前に位置する。しかし接続表現を使用する際には、主語の前、後ろ、それとも両方といった置ける位置を考える必要がある。

まず中国語の譲歩複文において前後節が同一主語である場合、従属節、主節のどちらか、あるいは両方に出現しているということは以下の例から分かる。

- (17) 其实即使他反对, 也没有什么用处。(《家》)
- (17')) 实际反对了什么地方でなんにもならないけど。(『家』)
- (18) 她即使搬到了团结湖, 也还可以回那个院子串门。(《钟》)
- (18')) 引っ越した後でも、そこへ遊びにいける。(『鐘』)
- (19) 这个时候即使可以回去, 她也不肯抛下他们。(《家》)
- (19')) このときたとえ彼女が家へ帰ることができたにしろ、彼らを置き去りにしてはゆかなかったろう。(『家』)
- (20) 即使完全无可逃脱, 他也不应该先自己往泥塘里滚。(《骆》)
- (20')) たとえ逃げ道がまったくなかったとしても、自分から進んで泥沼に飛び込むというほうはない。(『駱』)

また、主語の位置から考察すると、主語が従属節に現れるとき、(17) のように副詞が接続表現「即使」の後ろに来ることもあるし、(18) のように「即使」の前に現れることもある。しかし、もし主語が主節に現れるのであれば、いずれも副詞「也」「还」などの前にしか出現しないことが分かった。

さらに、(21) のような主語が省略できる例も観察された。

- (21) 他还认得路, 于是有些诧异了: 怎么不向着法场走呢? 他不知道这是在游街, 在示众。但即使知道也一样, 他不过便以为人生天地间, 大约本来有时也未必要游街示众罢了。(《呐》)
- (21')) 彼はそれでも道は見分けられた。どうもおかしい。どうして刑場へ行かないんだろう? それが見せしめに街を引き回されているとは、彼は知らなかったのである。だが、かりに知っていたとしても、同じことだっただろう。どうせ彼は、人間、この世に生まれた以上、時には見せしめに引き回されることだってある、と考えただろうから。(『呐』)

「但即使知道也一样，他不过便以为人生天地间，大约本来有时也未免要游街示众罢了。」の前に、「他还认得路，于是有些诧异了：怎么不向着法场走呢？他不知道这是在游街，在示众。」という文がある。前の文「他不知道这是在游街，在示众。」の主語「他」は意味上に、構文上に、後ろの「但即使知道也一样」の主語が一致したため、ここの主語が省略されても文の理解に支障がないと考えられる。

次は、日本語の例文を考察する。日本語の場合、従属節に主語が出現する場合、接続表現の前に来ることがもっとも多い。従属節には、「たとえ」という副詞と接続表現と一緒に現れた時に、主語を置かないことがよく見られる。主語が出現する場合、副詞によって主語の位置が異なり、主語は「たとえ」の後ろに来ることが多いのに対して、主語は「いくら」の前に来ることが多いことが分かった。

(22) あなたは闇夜に盲滅法にこのへんを歩き回ったって、絶対に井戸に落ちないの。(『ノ』)

(22') 即使黑天半夜你在这一带兜圈子转不出来，也绝不可能掉井。(《挪》)

また、中国語では (23)、(24)、(25) のように主節に現れた主語は、日本語に訳されると、すべての語を訳しているのではないということが観察された。(23) の「我们」は副詞「お互いに」に訳され、(24) の主語が主節に出現するが、日本語に訳す時、従属節に出現する。しかし、(25) の主節の「他」は従属節にも主節にも訳されないのである。このような例を考える際、翻訳の問題だと筆者は考えている。翻訳者により異なっているが、主語があってもなくても文の意味に影響を与えないからである。

(23) 这一夜，就是我对中国戏剧告了别的一夜，此后在没有想到他，即使偶尔经过戏园，我们也漠不关心，精神上早已在天之南在地之北了。(《呐》)

(23') その夜、私が中国の芝居と決別した夜だった。それ以後、二度とそれを考えたことない。たとい偶然に芝居小屋の前を通りかかることがあっても、お互いに関係がないのであって、精神的にはもはや、むこうは天の南にあり、こちらは地の北にあるといった具合だった。(『呐』)

(24) 这个时候即使可以回去，她也不肯抛下他们。(《家》)

(24') この時たとえ彼女が家へ帰ることができたにしろ、彼らを置き去りにしてはゆかなかったろう。(『家』)

(25) 即使他会看看星，调一调方向，他也不敢从容的去这么办。(《骆》)

(25') たとえ、星で方角を見ることを心得ていたとしても、そうはしなかったに違いない。(『駱』)

4.3 否定辞の有無からみる両言語の異同

坂原 (1985) によると、「譲歩文は条件文の否定だ」と述べている。日本語における譲歩を表す接続表現のうち、最も典型的な「ても」からみても、譲歩文は「pであ

ってもqでない」あるいは「pでなくてもqである」という言語形式で表される。これに対して、中国語においては典型的言語形式が「即使p, q」であるが、「不」「無」「没」もしくは「没有」などの否定辞がどのように使われるか、及び両言語の異同はまだ明らかにされていない。したがって、本節では両言語における否定辞の有無を調べてみた。調査結果は表3のとおりである。

表3 否定辞の出現状況 (個数(%))

パターン	出現位置	出現数及び比率	
		日本語原文	中国語原文
A	主節のみ	31 (37.3)	46 (39.0)
B	従属節のみ	21 (25.3)	20 (16.9)
C	従属節と主節両方無	27 (32.5)	33 (28.0)
D	主節反語文	4 (4.8)	12 (10.2)
E	従属節と主節両方有り	0 (0)	7 (5.9)
計		83 (100)	118 (100)

表3によると、日本語においても中国語においても、否定辞が主節のみと、従属節のみにある例が、もっとも多いことが分かった。つまり、従属節と主節のどちらかに否定辞が用いられるのが一般的であると言えるだろう。次いで、否定辞が前後の節のどちらにもない例が多いことも観察された。また、主節が肯定の平叙文ではなく、疑問文である文も観察された。しかし、否定辞が前後の節の両方にある場合、中国語原文は7例あるのに対して、日本語原文は一例もなかった。以下はそれぞれ例を挙げながら考察する。

4.3.1 否定辞が従属節か主節の一方にだけある場合

否定辞が従属節か主節の一方にだけある例文が多く見られた。(26) と (28) は否定辞が主節にある例で、(27) と (29) は否定辞が従属節にある例である。

(26) 即使出差去拉萨也绝对不肯坐飞机。(《活》)

(26') 君はラサへ行くにも絶対に飛行機には乗らないんだから。(『応』)

(27) 即使没有一点亮光,我也能走到灌木丛里去。(《人》)

(27') たとえ一点の明かりがなくとも,俺は灌木の茂みの中まで歩いて行ける。
(『人』)

(28) あなたは闇夜に盲滅法にこのへんを歩き回ったって,絶対に井戸に落ちないの。(『ノ』)

(28') 即使黑天半夜你在这一带兜圈子,也绝对不可能掉井。(《挪》)

(29) 町に出なくとも必要なものは何でもここで揃うのよ。(『ノ』)

(29') 即使不进城, 需要的东西也能得到, 这里一应俱全。(《挪》)

以上の(26)～(29)は両言語における典型的な譲歩文の例である。(26)と(28)は従属節の条件「ラサへ行く」「闇夜に盲滅法にこのへんを歩き回る」という想定下で、「飛行機に乗る」「井戸に落ちる」が成り立つはずである。しかも「ラサが遠いから、飛行機に乗る」「闇夜で何も見えないから、井戸に落ちる可能性がある」という推論が含意される。但し、主節の帰結「飛行機に乗らない」「井戸に落ちない」は従属節から予測されることとの対立が表されると考えられる。

また、(27)と(29)は従属節の「明かりがある」「町に出る」という条件を仮定すると、「明かりがあつたら、木の茂みの中まで歩いて行ける」「町に出たら、必要なものは揃う」という関係は通常なら成立するが、従属節の事態を起こさなくても、同じ帰結になった。つまり、「pであってもqでない」と「pでなくてもqである」という言語形式は両言語の譲歩複文にみられた。

4.3.2 否定辞が従属節にも主節にもない場合

従属節にも主節にも否定辞を使用しない例も多く見られた。

(30) どれだけベストを尽くしても人は傷つくときは傷つくのです。(『ノ』)

(30') 即使再竭尽人力, 该受伤的人也无由幸免。(《挪》)

(31) 即使知道也还一样。(《呐》)

(31') かりに知っていたとしても、同じことだっただろう。(『呐』)

(30)(31)のように従属節の動詞が継続動詞である場合は多く、主節に「还」「该」などの副詞がよく使われる。中国語の副詞「还」「该」は「動作・行為が引き続き行われている、あるいは状態が引き続き存在していること」(劉 1988:200)を表すため、従属節と主節が両方肯定文であり、主節の結果が変わらないことを強調すると考えられる。

4.3.3 主節が反語文である場合

さらに、例が少ないが、(32)(33)のように主節に平叙文でなく反語文である例文も観察された。

(32) 即使一方爱情已经消失, 也应当继续尽夫妻间的义务? (《金》)

(32') どっちかの愛がさめても、夫婦としての義務を続けるべきだというかな? (『金』)

(33) 仮令吾輩が瀬川先生を救いたいと思って、単独で焦心つて見たところで、町の方で聞いてくれないじゃありませんか。(『ノ』)

(33') 即使我有心挽留瀬川老师, 光我一个人着急, 得不到镇委员会的许可也是

枉然。(《挪》)

主節の事態を否定する際に、直接否定辞を使用することでなく、疑問文あるいは反語文で主節の事態を強調するという意味である。

4.3.4 否定辞が従属節と主節両方にある場合

そのほかに、(34) (35) のような主節にも従属節にも両方否定辞が出現する文も出現されたが、中国語原文に限った。

(34) 即使一辈子不显灵你也不能得罪呀! (《活》)

(34') しかも一生涯服を受からなくともこうして奉りあげるわけか。(『応』)

(35) 即使他每天二十四小时不吃不睡不做任何别的事情, 他也回不完每天接到的雪片般的来信。(《钟》)

(35') たとえ一日の24時間中、飲まず食わず、眠らず、それだけにかかりつき
りになっても、毎日どさっと届けられてくる手紙の束をさばききれなかった。
(『鐘』)

(34) (35) のような例は今回少なかったもので、偶然の可能性も排除できない。今後さらに研究が必要であろう。

5. まとめと今後の課題

本稿は先行研究に基づき、日本語原文、中国語原文および対訳例から、日本語の譲歩文と中国語の譲歩複文それぞれの特徴を明らかにした上で、対照考察を行った。その結果、両言語の構文上に、接続表現の異同、主語の位置と省略、否定辞の有無についての類似点と相違点を明らかにした。まとめると、以下のようである。

①日本語においても中国語においても、譲歩関係を表す複文で接続表現の使用が必須であるが、両言語における接続表現の使用が異なることが分かった。日本語で「接続助詞のみ」と「副詞+接続助詞」の二つのパターンがある。また、副詞も接続表現も、従属節にしか用いられないことが分かった。これに対して、中国語で「接続表現のみ」、「副詞のみ」、「接続表現+副詞」の三つのパターンがあり、接続表現は従属節に用いられ、副詞は主節に用いられることが分かった。さらに、日本語の副詞は中国語の接続表現「即使」に相当し、構文上の機能を果たしている。一方、「ても」「でも」「としても」などの接続助詞も中国語の接続表現「即使」にも相当し、意味上の機能を果たしていると考えられる。

②両言語とも主語の位置が制限がなく、従属節にも主節にも出現できることは類似点である。ただし相違点については、日本語では、接続表現の位置は固定されており、主語と関係していない。主語が従属節に出現するのは接続表現の前に来ることがもっとも多く、副詞「たとえ」と接続表現と一緒に現れた時に、主語が従属節にないこと

がよくあり、主語が出現するのであれば、「たとえ」の後ろに来ることが多かった。他方、中国語は接続表現の使用位置は主語と関係しており、従属節に接続表現が使用される場合、主語の前と後ろの何れも可能であるが、主節に接続表現が使用される場合、主語の後ろに置かなければならないことが分かった。

③否定辞の有無により、五つのパターンに分けた。日本語にも中国語にも否定辞が主節と従属節のどちらかにあるものは多いことが分かった。また、主節が肯定の平叙文ではなく、疑問文である文も観察された。考察した結果、「pであってもqでない」と「pでなくてもqである」という言語形式は両言語の譲歩複文にとられると考えられる。また、主節の事態をより強調する時は、従属節にも主節にも両方否定辞と共起すると考えられる。

本稿で「即使類」譲歩複文に関する日中両言語の類似点と相違点を明らかにしたが、ほかの譲歩複文形式を今回の調査では行っていない。今後の課題としては、日中譲歩複文の下位分類について、範囲を広げ、研究を深めていきたい。

付記

本稿は、張銳（2016.8.19）「譲歩関係を表す複文における日中対照研究」（日本語教育振興会 2016 年度年次大会）での口頭発表をもとにし、修正、加筆を加えたものである。ご指導いただいたロング先生にお礼申し上げます。

用例出典

北京日本学研究中心（2003）「日中対訳コーパス」

【日本語が原文である】

『ノ』	『ノルウイの森』	《挪》	《挪威的森林》
『あ』	『あした来る』	《情》	《情系明天》
『破』	『破戒』	《破》	《破戒》
『金』	『金閣寺』	《金》	《金閣寺》

【中国語が原文である】

《活》	《活动变人形》	『応』	『応報』
《家》	《家》	『家』	『家』
《彷徨》	《彷徨》	『彷徨』	『彷徨』
《呐喊》	《呐喊》	『呐喊』	『呐喊』
《人》	《人啊，人》	『人』	『ああ、人間よ』
《骆驼》	《骆驼祥子》	『骆驼』	『骆驼祥子』
《钟》	《钟鼓楼》	『鐘』	『鐘鼓楼』

参考文献

小矢野哲夫（1998）「モダリティ副詞の文章上の機能」吉田金彦『ことばから人間を』昭和堂, pp.120-132

- 小泉保 (1987) 「譲歩文について」『言語研究』 91, pp.1-14
- 大河内康憲 (1967) 「複句における分句の接続関係」『中国語学』 176 日本中国語学会, pp.1-12
- 久野璋 (1978) 『談話の文法』 大修館書店
- 言語学研究会・構文論グループ (1986) 「条件づけを表現するつきそい・あわせ文 (四) —その4・うらめ的つきそい・あわせ文—」『教育国語』 86, pp.49-68
- 坂原茂 (1985) 『日常言語の推論』 東京大学出版会
- 佐久間まゆみ (2002) 「3 接続詞・指示詞と文連鎖」野田尚史・益岡隆志・佐久間まゆみ・田窪行則『日本語の文法4 複文と談話』 岩波書店
- 張北林・李光赫 (2012) 「デモの再分類と日中対照研究」『漢日語言対比研究論叢』 第3号 北京大学出版社, pp.89-106
- 張北林・趙海城 (2014) 「関数検定から見たデモ文の日中対照研究」『明星大学研究紀要—人文学部』 第50号 明星大学, pp.33-44
- 張北林・李光赫・趙海城 (2015) 「デモ譲歩文の文法化と主観化—日中対照の立場から—」『明星大学研究紀要—人文学部』 第51号 明星大学, pp.89-99
- 張銳 (2016) 「譲歩関係を表す接続助詞「ても」と中国語の相当表現の対照研究」日本語教育国際研究大会 (ICJLE2016) 口頭発表原稿
- 鄭亨奎 (1994) 「接続表現の日中対照研究：譲歩文を中心に」『広島大学教育学部紀要 第二部』 43, pp.247-254
- 野田尚史 (2004) 「見えない主語を捉える」『言語』 33-2 大修館書店, pp.24-31
- 平井昌夫 (1969) 『文章表現法』 志文堂
- 前田直子 (1991) 「条件文分類の一考察」『東京外国語大学日本語学科年報』 13 東京外国語大学, pp.55-79
- 前田直子 (1993) 「逆接条件文『～デモ』をめぐって」益岡隆志編『日本語の条件表現』 くろしお出版, pp.149-167
- 前田直子 (2009) 『日本語の複文』 くろしお出版
- 劉月華他著 相原茂他訳 (1988) 『現代中国語文法総覧 (上)』 くろしお出版
- 劉月華他著 相原茂他訳 (1991) 『現代中国語文法総覧 (下)』 くろしお出版
- 山田孝雄 (1970) 『日本文法論』 宝文館
- 郭志良 (2002) 『現代汉语转折词语研究』 北京语言大学出版社
- 黎锦熙 (1924) 『新著国語文法』 商务印书馆
- 吕叔湘 (1982) 『中国文法要略』 商务印书馆
- 王维贤 (1994) 『现代汉语复句新解』 华东师范大学出版社
- 邢福义 (2001) 『汉语复句研究』 商务印书馆

(ちょう えい・首都大学東京大学院博士後期課程)